Vol.4
2016.9

新潟産業大学

産大生と地域のかけ橋

ローカレッジ

Local × College

第9回
「大学は美味しい!!」フェア
活動の成果を地域で発表
「インターンシップフォーラム長岡」「COC+シンポジウム」ほか

「子育てパスポート事業」の
自治体アンケート調査
～「柏崎に関する研究発表会」より～

まちかど研究室 七夕パーティー
後谷ダム見学 に行ってきました！
ひかり遊び「万灯会」

地域連携活動ニューストピックス 2016 夏
「柏崎地場産野菜応援プロジェクト」
「中学生お仕事創生塾」「たかだ竹あかり」ほか

この冊子は新潟産業大学経済学部学生が制作しました

第9回「大学は美味しい!!」フェア

2016年5月26日～31日に開催された第9回「大学は美味しい!!」フェア。新潟産業大学としては4回目の参加となる今年も、各ゼミナールが開発した大学×地域コラボ商品を沢山持って、新宿高島屋で元気に販売してきました。

「大学は美味しい!!」フェアとは、大学発のうまいものを紹介、販売する新宿高島屋の人気催です。産大は経済学部として地元産の農産物や銘菓等に注目し、地域の企業と協力した商品開発によって地域のPRや活性化を目指しています。

本学の参加は今年で4回目（長岡で開催された新潟県版を除く）となり、年々新たな地域コラボ商品が誕生しています。主に商品開発に携わったゼミや販売中心に担当するゼミなど、ゼミ横断的に多くの学生たちが参加している全学的な取り組みとなっています。今回販売に携わった学生は2～4年生の総勢23名（3チームで交代）で、元気な呼び込みやお客様とのコミュニケーションで商品の魅力を知っていただき、商品流通について実践的に学ぶ大変貴重な経験ができました。

特に今年度は参加者による事前勉強会や新野屋での袋詰め作業、合同反省会といった、イベント前後の学習の場を大切にすることで、参加メンバーの連帯感も高まり、会場では協力しながら仕事を進めることができました。

お客様の年齢に合わせて
商品説明の仕方を変えるなど、
大変だったけど、
楽しく接客できました！

産大発！
大学×地域コラボ商品

えちゴンも
駆けつけて
くれました♪

とびっきりの網代焼
たな米・風輪

柏崎で昔から親しまれている名菓「網代焼」を学生が農薬不使用、手作業で育てたお米でつくった数量限定品「たな米」と「風輪」。
今回は新商品の「黒米入りかたもち」も大人気でした。

会場でのミニ講演会で
講師も務めました！

ふふ豆
塩味・砂糖味

越後のお酒
「青濤」も
ありますよ！

縄文クッキー
おうくんとかえんちゃん

十日町市ビジネスプランコンテスト「トオコン」３位入賞の企画を商品化。王冠型土器、火焔型土器をモチーフにしたキャラクターが可愛い！
新商品のくるみ入り手まりサブレも好評でした。

留学生が柏崎市高柳町門出地区の調査の中で、地域産の青大豆に着目し、キャラクターやラベルのデザインなどを手がけました。「ふふ豆」の「ふふ」とはモンゴル語で「青い」という意味。

＊メディアで紹介されました＊

▲毎日新聞購読者用情報誌
「毎日夫人」９月号

▲6月2日　NHK「あさイチ」

また、イベント期間は、学生が中心となってTwitter（@nsu_delicious）で随時情報発信をしていました。

下級生のやる気に驚きました！
事前にチーム毎に打ち合わせを重ねておけば、来年はもっと素晴らしいイベントになるでしょう!!

「大学は美味しい!!」フェア参加・大学×地域コラボ商品開発

活動の成果を発表しました

2月25日「柏崎に関する研究発表会」

於：柏崎商工会議所

経済経営学科　4年○村上 健太朗　3年○島岡 譲　2年　エレベゲダワー ソヨルマー
文化経済学科　4年　小山 美洸　　2年　ツェデブドルジ サランゲレル
（学年は平成27年度当時のもの／○は口頭発表者）

柏崎

第6回「大学は美味しい!!」フェアから3年連続参加した4年生を中心に、3年間の活動の集大成として、初めて学外で発表を行いました。商品開発や販売担当でイベントに携わった複数のゼミナールからの代表学生による合同チームでの参加も初の試みでしたが、次年度への引き継ぎのよい契機にもなりました。

◀学内での事前発表会の様子

「柏崎に関する研究発表会」での4年生を中心としたプレゼン内容を引き継ぎ、3年生でチームを再編して参加しました。

これまで地域連携活動として捉えていた商品開発や販売実践が「課題解決型インターンシップ」としても評価していただけることが分かり、発表直後からスタートした就職活動にも自信をもって臨むことが出来ました。

3月10日「インターンシップフォーラム長岡」

於：アオーレ長岡

文化経済学科　3年　増田 泰大
文化経済学科　3年　高橋 桃花
経済経営学科　3年　島岡 譲
文化経済学科　3年　石橋 李紗
（学年は平成27年度当時のもの）

長岡

新潟

8月22日「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」シンポジウム「地域の未来創生に向けた新潟の魅力発見」

於：ANAクラウンプラザホテル新潟

経済経営学科　4年　小川 貴廣

「『お米』と『善意』本位制地域通貨『風輪通貨』と大学×地域コラボ商品開発の取り組みについて」をテーマに、阿部ゼミナールで取り組んできた「風輪通貨」に関する活動を中心に取り上げ、そこから派生して誕生した米菓「たな米」や、他のゼミナールが開発した大学×地域コラボ商品についても紹介しました。

小川さんは「私たちの行ってきた活動について約250名もの大勢の方の前で話すことができたのはとても良い経験になりました。また、他大学の学生の取り組みについて知る機会にもなり、とても良い刺激を受けました。今後この経験を活かしていきたいと思います」と振り返りました。

「子育て支援パスポート事業」の自治体アンケート調査

～「柏崎に関する研究発表会」より～

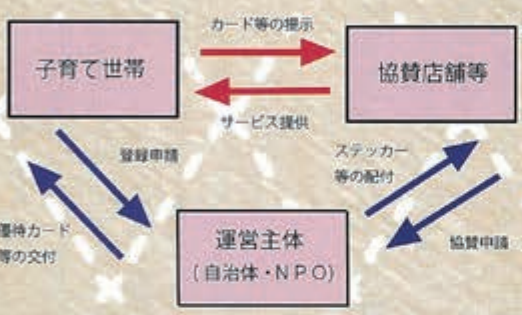
荒井大・井守一真・羽深圭希・渡辺悠太（経済経営学科4年）

柏崎の子育てについて考える

八木ゼミナールでは、「まちかど研究室」の活動の一つとして、大学生の視点から柏崎に必要なものを考え、調査・研究を行っています。ゼミでテーマを出し合った結果、私達のチームでは、子育てについて考えることになりました。その一環として、内閣府が推奨し、多くの地方自治体が導入している「子育て支援パスポート事業」について、柏崎市でも導入するために、実施モデルを検討しております。

子育て支援パスポート事業とは

この事業では、まず自治体が、子育て世帯に対して、子育て世帯であることを証明するカードを発行します。また協賛企業に対しては、協賛店であることを示すステッカーを発行します。カードを持っている子育て世帯が、ステッカーのある協賛店でカードを提示すると、お店から何らかの優待サービスを受けることができる仕組みです。



図①：子育て支援パスポート事業の概念図

このように、企業の協賛によって、子育て世帯を支援する取組のことを、「子育て支援パスポート事業」といいます（図①）。

この事業の特徴は、企業参加型の子育て支援事業であるため、行政負担が少なく子育て支援を拡充できることです。

パスポート事業の目的としては、直接的経済支援だけでなく、子育て世帯を支援する機運を醸成することも目的もあげられています。さらに、副次的効果として、地元での消費を誘導することで、地元経済の活性化につながることも期待できます。

これまでの調査・研究について

昨年度は、子育てというテーマを決めてから、平成27年3月に発表された国の「少子化対策大綱」を調べることから始めました。そこでパスポート事業について知り、国の目標として事業の協賛店舗数を2011年の22万店から、2020年44万店へ倍増する目標があることも知りました。しかし、私たちが実際に柏崎市の担当部局へ、直接ヒアリングを行ったところ、市ではパスポート事業は検討していないとのことでした。そこで、私たちは新潟県内の各市町村の取り組み状況をアンケート調査することで、柏崎市への導入可能性を検討することになりました。

アンケートの内容は、内閣府が平成23年度に行った、全国の自治体に対するアンケート調査を参考に作成しました。柏崎市を除く県内28市町村に郵送で配布し、22票の回答がありました。回収率は78・5％でした。回答中、事業を導入している自治体は、新潟市・上越市・新発田市・五泉市・阿賀野市・見附市・妙高市・糸魚川市の8つです。

また、アンケート調査からわかったこととして、事業実施のきっかけをみると、行政側からのきっかけが大半であり、「先行自治体の取り組みに倣った」ケースが最も多いことがわかりま

文：荒井大　デザイン：駒村彩佳

した。自治体が期待する効果をみると、子育て世帯の負担の軽減という直接効果のほかに、子育て支援に対する啓発効果やイメージアップ、地元商店街の活性化といった副次的経済効果も期待していることがわかりました（図②）。

図②：自治体が期待する効果（複数回答）

さらに、予算の状況をみると、県内市町村では、大半が数十万～百万円程度の年間予算で事業を行っていることがわかりました。全国では予算なしで実施している自治体も多く、事業開始年度には数百万円程度の初期費用が必要となるものの、運営自治体にとっては財政負担の軽い子育て支援事業であり、柏崎市も多額の予算立てをせずに運営できると考えられます。

また、制度について全加入の自治体と登録制の自治体があることもわかりました。しかし、登録制の場合も登録率は高く、いったん事業を開始させてしまえば、高い登録率が見込まれることも期待できます。

実施モデルと今後

以上の調査から、パスポート事業は、企業参加型であるため、少ない予算で行政が運営することができ、一度運営をスタートさせてしまえば、高い登録率が見込まれ、対象の子育て世帯に対して効果的に経済的支援が行えることが分かりました。

そこで、私たちは柏崎市でパスポート事業を行うための実施モデルを考えてみました（図③）。対象要件を一番緩い条件である18歳未満児童のいる子育て世帯としたとき、平成22年度国勢調査より柏崎市では８０８４世帯が対象となります。仮に登録制にし、対象の80％の登録を想定した場合、利用世帯数は６４６７世帯と見込まれます。対象世帯当たり１００円とすると、毎年80万円の事業予算かかると予想されます。

以上の年間経費の他に、対象世帯へのカードの配布・協賛企業へのステッカーの配布・ポスター等による広報活動」など数百万円の初年度経費がかかると考えられます。また事業導入後の広報活動・協賛企業の募集によっても事業の効果は大きく変化します。現在は、これらの初期費用や運営形態等について、自治体へのヒアリング調査を行い、検討している段階です。

対象世帯要件：	１８歳未満・児童数要件なし
対象世帯数：	８０８４世帯（平成２２国勢調査）
登録世帯数：	６４６７世帯（登録率８０％を想定）
対象世帯当たり予算：	１００円
事業予算（単年度）：	８０万円

図③：柏崎市での実施モデル

学生の視点から地域活性化の提案を

「柏崎に関する研究発表会」

「柏崎に関する研究発表会」とは、柏崎商工会議所 総合建築部会と（一社）新潟県建設業協会 柏崎支部が主催する、新潟工科大学と新潟産業大学の学生よる研究発表会です。平成14年度より毎年実施し、「柏崎をより住みやすい町に」、「柏崎を活性化させるために」というテーマで、二大学の専門性を活かした研究発表、提案がなされます。

２０１６年２月25日に開催された第14回の発表会では、産大からは第1部「大学と関わり」の中で、「まちかど研究室」（工科大との合同発表）と、「『大学は美味しい!!』フェア」についての活動報告を、また第2部「研究発表」では「小規模デマンド交通」、「地方書店の今後」、「子育て支援パスポート事業」についての発表をしました。地域の方々に研究成果を聞いていただくことで、学生自身の今後の学びや活動に活かせるよう、また少しでも柏崎の活性化につなげていけるようにできればと思います。

グリーンツーリズムを学ぶ

～安らぎと日本の風景を求めて～

現在注目を集めているグリーンツーリズム。なんとそれがこの産業大学で学ぶことができるのです。「グリーンツーリズムって何？」というそこのあなたのために、「グリーンツーリズム演習」という授業でおこなったフィールドワークと共にご紹介します。

グリーンツーリズムとは

そもそもグリーンツーリズムとは何なのか。これは「観光」の一つの在り方です。特に「環境」「自然」がキーワードになっており、これら二つに関わる体験をすることと捉えてもらってよいでしょう。例としては、旅館ではなく民家にとまり、田舎の生活を体験する「農家民泊」や「田舎体験」、「田植え」や「稲刈り」といった平野部のものだけでなく、「イルカウォッチング」や「ホエールウォッチング」など海で活動するものもあり、体験内容は様々です。

自然に触れて
心も身体もリフレッシュ

実際に体験してみよう！

～小国での小国和紙、紙すき体験～

「グリーンツーリズム演習」という授業では講義だけでなく、実際に体験するためにフィールドワークを行っています。今回はその一つ、「小国和紙の紙すき体験」をご紹介します。

今回の体験では紙すきを行う他、材料になる「こうぞ」の育成や、紙すきを行うまでに必要な過程の説明等も聞かせていただくことができました。さて、実際に和紙を作ってみると中々に大変。木枠の揺らし方、厚みを均一にするなど、紙一枚といえども気を付けないといけないことが多くあります。ですがこの大変さを経験することは、身近なものに対するありがたみを感じる良いきっかけにもなりました。

また、この工房で制作された和紙は主に日本酒のラベルに使用されています。それだけでなく、隣接する「おぐに和紙の店」では、色鮮やかな折り紙、お洒落なライトといったモノも販売されています。地元の産業や特産品について学ぶ、よい機会にもなりそうですね。

作ったものがこちら！

和紙の材料となる「こうぞ」の芽。国内での生産が減少しているため、育成も行っている

主に日本酒のラベルに使用されています。身近な所で地元の伝統文化が活躍しているかもしれませんね

グリーンツーリズムの魅力

グリーンツーリズムは楽しいだけでなく、多くのことを感じることができます。懐かしさや安らぎ、身近なものを見る目の変化、地元や地域産業への理解も深まるはずです。

「グリーンツーリズム演習」では実際にツアー企画を考えています。現在注目を集めているグリーンツーリズム。今後世間からのニーズも高まってくるかもしれません。みなさんもこの授業に参加し、グリーンツーリズムへの理解を深めてみてはいかがでしょうか？ツアーに参加して生活に潤いを与えるだけでなく、将来への選択肢の幅を広げるという点からも、学ぶことは大いに意義があることでしょう。

取材・文・デザイン：梅澤佑介

新潟工科大学 研究室

5年目突入!!

新潟産業大学と新潟工科大学が共同で運営している空き店舗活用事業、「まちかど研究室」。5年目を迎えた今年度の春～夏の活動の一部をご紹介します。

着ぐるみ姿で販売する権田ゼミ生

今年もえんま市に出店!!

毎年6月14～16日に開催されるえんま市、今年度もまちかど研究室にて商品の販売を行いました。今年度のまちかど研究室では、産大の阿部ゼミと権田ゼミを中心に、学生たちが飲み物や大学×地域コラボ商品を販売しました。

3年生権田ゼミの学生はディズニーの着ぐるみを着て販売をし、子どもたちに大人気でした。ジュースや烏龍茶、ラムネを販売し、なかでもラムネが人気商品で多くのお客様に購入していただきました。大学×地域コラボ商品は、「たな米」や「かたもち」、「縄文クッキー」などを販売しました。多くの学生や先生方にも協力していただいたおかげで、飲み物、大学×地域コラボ商品共に完売することができました。

今年は3日間とも平日に開催されるということで客足が危ぶまれましたが、平日ということもあり、夜に来られるお客さんが多く、また、ゼミや授業単位で多くの学生たちがまちかど研究室に足を運んでくれ、終わりの時間まで販売を手伝ってくれた学生もいて、とても楽しく販売することができました。

笑顔いっぱいで販売しました♪

「たな米」などの地域コラボ商品を販売する阿部ゼミ生

書道とふれあいの会が絵あんどん展に出展

8月6日、7日に行われた「平成28年度ふるさとまつり・絵あんどん展」に、今年度からまちかど研究室で活動している「書道とふれあいの会」が出展しました。

「書道とふれあいの会」は7月から金曜日午後（不定期）にまち研で活動をしています。今後、地域の方にも参加いただける企画を予定しています。詳しくは、新潟産業大学地域連携センター　0257－24－8441までお問い合わせください。

取材・文・デザイン：梅澤隼人・宮川浩一郎

新潟産業大学 × まちかど

流しそうめんは小学生たちに大人気！！

7月5日と7日の2日間に小学生を主な対象とした七夕パーティーを行いました。「まちかど研究室を地域の方々に知ってもらいたい」という思いで企画を話し合い、七夕企画を実現することができました。

大学生と七夕パーティー inまちかど研究室

1日目は小学生と一緒に短冊を書いたり、折り紙で飾りを作る作業をしました。留学生も含む多くの大学生が駆けつけ、みんなの願いがこもった短冊がたくさんできて、まちかど研究室前に設置した竹が華やかに飾り付けられました。

2日目は七夕そうめんやフルーツポンチの調理実習、You Tube鑑賞を行いました。他のゼミの学生も協力してくれ、小学生と一緒にフルーツポンチの白玉をつくったり、そうめんの中に入れる野菜の型抜きを体験してもらいました。最後に小学生に自分達で作ったそうめんとフルーツポンチを味わってもらい、喜んでもらうことができました。You Tubeの鑑賞では、小学生たちが自分でパソコンを操作するという機械に強い一面に、スタッフの学生たちは驚きを隠せませんでした。

今回2日間でのべ90名以上の小学生や保護者の方々、大学関係者にまち研に足を運んでいただきました。今回の企画を通して、多くの個性豊かな小学生たちがまちかど研究室に訪れてくれ、とても賑やかで楽しい2日間でした。

折り紙で七夕飾りをつくります

社会人学生が育てた 農薬不使用の野菜

毎週土曜日13時30分～15時30分、社会人学生の植木敏郎さんがまちかど研究室の店頭で、農薬不使用で育てた野菜を地域の方々（だんらん畑・みんなの農場）と協力して販売しています。柏崎の地場産野菜を味わってもらいたいと願って一生懸命育てた野菜です。土曜日はまちかど研究室に足を運んで、ぜひお買い求めください。

これからの予定

10月27日（木）
小学生対象ハロウィン企画
（新潟産業大学　権田ゼミ）

11月26日（土）
スタンプラリー＆オリエンテーリング@商店街
（産大×工科大　学友会）

今後の企画にご期待ください!!

『かしかり農業見学・体験会』

平成28年8月25日(木)

振興局⇒後谷ダム（西山町）⇒
「新之助」ほ場（刈羽村）⇒
天田営農組合⇒割烹いしと（昼食）⇒
ファームくじらなみ⇒振興局

地域の農産物についての理解を図る目的で、柏崎地域振興局農業振興課主催の「かしかり農業見学・体験会」が地域の消費者に対して開催されました。市民の方たちにまざって、本学の学生、教職員も参加させていただきました。

柏崎地域振興局から出発。

後谷ダム

柏崎刈羽は県内では雪の降雪量が少なく、かつては夏に農業用水をめぐる争いも起こっていたそうです。後谷ダムは別山川の支流の後谷川から取水し、農業用水を安定供給するためのダム湖です。西山の自然体験交流施設「ゆうぎ」の近くにダムがあるのは知っていましたが、どんな目的で建設されていたのか考えたこともありませんでした。

真剣に説明を聞きます。

後谷ダムをバックにポーズ！

ジャンプ！！

「新之助」ほ場

刈羽村に移動し、「新之助」という新しい品種の米の水田を見学しました。背丈が低くしっかりしているので風雨に強そうです。コシヒカリよりも収穫時期が遅いとのことで、昨年収穫した「新之助」を特別に試食させていただきました。いつも食べているお米（柏崎産コシヒカリ）より大粒な感じで食べ応えがあります。甘みも強くて、新米でなくても美味しいと思いました。

広い田んぼと米山。

「新之助」おにぎり

暑かった！！

矢田営農組合

次に以前も、本学でマコモダケの見学にお邪魔した矢田営農組合へ。今回は枝豆の収穫体験をしました。畑の土は良く耕されているので、根からすぐに抜くことができました。収穫した枝豆は自分たちで袋詰を行い、お土産にいただきました。

袋につめます。

機械が豆だけを選別。

枝豆の収穫を体験！！

収穫した枝豆いただきました。

割烹 いしと

お昼は７月に、柏崎市内の飲食店が提供していた「水球応援ランチメニュー」でした。自家製一夜干し鯖で水球をしている様子を表現していてたまごが水球のボールのイメージだそうです。「地産地消」を意識した美味しい地元産野菜を、たくさんいただきました。

地産地消水球応援ランチ！！

ファームくじらなみ

最後は鯨波のファームくじらなみでの、ブルーベリー摘みでした。摘むのがけっこう楽しかったので、ついついたくさん取り過ぎてしまいました。

ブルーベリー収穫に夢中…

完熟ブルーベリー。

今回いただいた地元産の農産物は新鮮で、とても美味しかったです。ツアーや大学の講義をきっかけに、買い物する時は生産地を見て、柏崎産のものを選ぶようにしています。気温が30度を超える日中の収穫体験は、ほんのちょっとだけ農作業の大変さも、分かった気がしました。

取材・文・デザイン：長井美法

新潟産業大学の参加者全員です。
おつかれさまでした。

後谷ダム見学に行ってきました！

教職課程の１、２年生で記念撮影。天気も良く気持ちの良い見学となりました。

後谷ダムの特徴と役割

２０１６年７月28日に教育課程の１、２年生総勢29名で、北陸農政局が行う農業農村整備の概要の説明を聞いた上で、後谷ダムの見学に向かい、日本と柏崎の農業事情、ダムが地域にとってどのような役割や利益をもつのかという説明を職員の方から聞かせていただきました。

後谷ダムは柏崎市西山町に１９９３年に着手、２００８年に竣工したゾーン型フィルダムというタイプのダムです。ゾーン型フィルダムとは土と岩を盛り立てたもので、地盤強度が弱く変形しやすい土地に柔軟に対応することが可能です。

堤体上からの貯水池の景色。ダム周辺には貴重な動植物が多々確認されています。

そもそもダムというのはどのような役割を持つものなのか？それは大きく三つに区分されます。一つは工業用水、農業用水、水道水の供給といった水利事業としての役割、二つ目は河川維持、水害を防ぐといった洪水、渇水対策としての役割。三つめは水力発電としての役割です。後谷ダムは柏崎市及び刈羽村の農業用水の安定供給のために建設されたダムです。柏崎市と刈羽村では主に水稲栽培が行われており、新潟県全体では、農業生産額の６割を水稲が占めているのに対し、柏崎市・刈羽村では水稲に占める割合が７割にも及びます。水稲栽培は仮想水（バーチャルウォーター）と呼ばれる生産に要する水の量が穀物類の中では断トツに多く、ダムによる水の安定供給が無ければ地元の農業は大きく衰退してしまったかもしれません。また農業用水の確保、圃場整備や用排水路の整備を行うことで農業経営の近代化や営農の合理化につなげることができるようになり、

結果として水稲労働時間の減少や農地集積率の増加などより効率的な営農を行うことが可能になりました。普段ダムに立ち入ることはできませんが、ダムの中は非常に気持ちがよく、景色も綺麗で自然の景観を損ねるような事はありませんでした。

水の一滴は血の一滴

かつて柏崎・刈羽平野では深刻な水不足に陥っており、水を原因とする争が起こった事もしばしばあると耳にしました。『水の一滴は血の一滴』、この言葉は水が農業や生活に欠かせない重要なものだということを表しています。

帰りに大塚頭首工に立ち寄りました。

ダム堤体上で記念撮影。景色が綺麗で気持ちいい！

大塚頭首工を見学する学生たち。説明を真剣に聞いています。

この施設は河川の流水を用水路に引き入れるためのもので、頭首工という独特な名前の由来はは水を頭の高さまで押し上げるというものと、用水路の頭首部に設けられる水門という二つのものから来ています。

今回のダム見学では身近にありながら普段直接関わることのないダムというものがどのような役割を持ち、地元農業に多大な恩恵を与えるものなのだと理解することができました。生活用水を得ると言うことは生半可なことではなく、多くの人々の努力によって為されるのだと改めて実感しました。

ひかり遊び 万灯会

約1500のキャンドルの灯りがダム湖を幻想的に照らします。

8月27日の夜、後谷ダムをキャンドルグラスの灯りでライトアップするイベント、「ひかり遊び　万灯会（まんとうえ）」が開催されました。このイベントは平成20年12月の試験湛水によりダムが初満潮になったことを記念して始まったもので、以後、平成23年から毎年夏のイベントとして定期的に開催しており、今年で7回目となります。

イベントの開催に向けて地域の方々によってダム堤上や周辺の草刈り作業が行われ、また、キャンドルグラスには、地元の小学生たちが思いおもいの絵を描いた色紙をガラス瓶に巻いたものも数多く並べられました。「西山たんぽぽコーラス」による優しい歌声が幻想的な雰囲気に一層彩を添えて、地域のみんなでつくりあげた催しとなっている様子が窺えました。

学生たちは日中の自然豊かな後谷ダムの様子を見学に来ていましたが、昼間とはまた違った表情のダムの姿に見入っていました。

取材・文・デザイン：榎本優大

地域連携活動ニューストピックス 2016 夏

「柏崎地場産野菜応援プロジェクト」始動！

柏崎の地場産野菜に若い人が親しみ、消費を通じて地域を活性化させることを目指して、「柏崎地場産野菜応援プロジェクト」の活動が始まりました。

活動の第一弾として、矢田営農組合のマコモタケのPRを行います。それに先立ち、8月18日（木）に勉強会と農場見学を行いました。ゼミや学年の枠を超えた16名の学生が集まりました。市の農政課の阿部さんと矢田営農組合の石黒さんを講師にお招きして、柏崎の農業の現状や矢田営農組合で栽培している地場産野菜について学びました。その後、矢田営農組合のマコモタケ畑を見学しました。マコモタケの苗の背丈は、収穫時には2mを超えると聞きました。見学時ですでに1・7m程に成長していて、大きさに圧倒されました。大きな苗の根元の部分を食用にします。一般的には炒め物や天ぷら、漬物などで食べられています。味にクセがなく食感はアスパラとタケノコの中間と言われます。他にも、矢田営農組合の人気商品である枝豆の選別機なども見せていただきました。

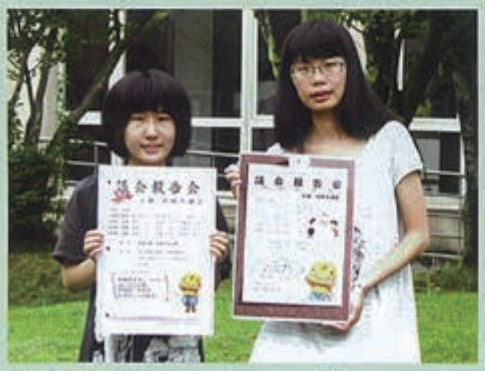
これからの具体的な活動は、ゆるキャラ制作と商品開発です。マコモタケがモチーフの魅力的なゆるキャラと、マコモタケを使った斬新な商品の開発を目指します。来年5月の「大学は美味しい!!」フェアへの出品を目標に頑張ります。

4年生2名、3年生10名、2年生4名の計16名（社会人学生含む）が勉強会に参加しました。

議会報告会ポスターを作りました

柏崎市議会から依頼を受け、議会報告会の案内を制作しました。パソコンのデザインソフトを活用し、学生のアイディアで構成を考えました。完成品はポスターの他、A4サイズで回覧板に挟む形でも利用して頂きました。

市民の皆さんに、市議会への親しみや関心を持ってもらえるよう工夫しました。私たちもポスター制作を通して、市議会への興味が深まりました。今後も大学で学んだ技術を活かして地域に貢献できたら嬉しいです。



文化経済学科2年の神田と駒村が作りました♪

文・デザイン：神田夏海

中学生お仕事創生塾

商店街を歩いてまちづくりを考える

8月21日（日）、アルフォーレにて「小学生お仕事体験塾」との同時開催で、柏崎市教育委員会主催の「中学生お仕事創生塾」が開催され、産大の学生3名がスタッフとして参加しました。

中学生は三つのテーマから一つを選択し、産大生がスタッフを務めた「まち歩きを通して、柏崎のまちづくりを考えよう！」では、商店街の店主にインタビューをしたり、地域通貨「風輪通貨」で買い物をしたりしながら、柏崎の魅力を活かしたまちづくりについて考えました。

お店の方から商店の歴史や地域に対する思いなどを伺います。みんな真剣な表情！（美野屋にて）

経済経営学科1年の五十嵐滉貴さんは、中学生と一緒に商店街を歩いた当日の様子を振り返って「中学生が率先して商店街のお店の方に商店街が抱える問題や、今後の活性化に向けての考えなどをインタビューしていました。またアシスタントとして同行した私自身も、商店街の現状や取り組みについて知ることができ、自分たちに何が出来るか、地域を活性化させるための方法は何なのかなど、深く考えさせられました」と話してくれました。

たかだ 竹あかり

竹の伐採、加工作業に汗を流しました

今年で3年目となる、産大生が企画運営に参加している高田コミセン主催のイベント「たかだ　竹あかり」。史跡・飯塚邸会場とコミセン会場の二つの会場を照らす竹灯篭の準備段階から、学生たちは竹の伐採や灯篭の形状への加工作業に汗を流しました。7月から9月の日曜日に合計5回、早朝から昼にかけて地域の竹林の整備をしながら、地域の方に指導をしていただき、次々と竹を切り出していきました。特に初回の7月3日はあいにくの雨の中の作業にも関わらず、9名の男子学生が頑張りました。

今年のイベントは、かつて柏崎地域でも行われていた「二十三夜待」の行事にちなんで、9月24日（土）、25日（日）に開催予定です（原稿執筆時現在）。昨年度、本学と連携協定を結んだ、大正大学　地域創生学部の学生5名と共に、主に飯塚邸会場の設置や警備、会場での演奏会の司会や曲目解説、販売ブースなども担当します。沢山の方々に柏崎の史跡を訪れて、幻想的な夜を体験していただければと思います。

雨の中の竹の伐採作業、頑張りました！

FMピッカラ「てくてく柏崎」にゲスト出演しました！

8月16日放送　草生水献上場

▲山の中にあり、
夏の風がさわやかでした

8月23日、30日放送　二田物部神社

▲Vol.3の取材以来、二度目の訪問
冬と夏で景色がガラリと変わっていました

今年3月に発行したローカレッジVol.3の特集「西山の伝統とこれから」を見たFMピッカラさんより、毎週火曜日12時30分から放送のまち歩き番組「てくてく柏崎」に、ゲスト出演をするお誘いを受けました。

編集に携わった学生が取材を受け、8月16日から9月6日まで、4週連続でオンエアされました。

9月6日放送　石地わさび園

▲新作のわさび羊羹&
わさびコロッケバーガー
ポテトはわさび塩味

取材・文・デザイン：神田夏海　イラスト：丸山莉奈

産大生と地域のかけ橋
ローカレッジ　Vol.4
2016年9月30日 発行

編集・発行責任者
新潟産業大学　経済学部講師
権田 恭子

※この冊子に関するご意見・ご感想をお寄せ下さい。
今後の参考にさせていただきます。

〒945-1393　柏崎市軽井川4730番地
新潟産業大学　地域連携センター
TEL：0257-24-8441
FAX：0257-22-1300

この度、半年ぶりに「ローカレッジ」Vol.4を無事に発行することができました。昨年度発行したVol.1～3は、柏崎市の委託事業である平成27年度大学・地域連携推進事業「学生と市民による地域の魅力発見・発信のための広報誌制作」の活動として編集・発行しましたが、学生たちの地域連携活動の成果を地域の方々、高校生などに知っていただくメディアとして好評いただき、委託事業の終了後も引き続き発行していくこととなりました。

Vol.3の発行以降の半年で、学生たちは様々な場面で地域に触れ、地域を考える機会をいただきました。特に今年の夏季休業中は各方面からお声がけいただき、大学生の地域連携活動への期待が、益々高まっていることを実感することができ、本誌も16ページと盛りだくさんの内容でのお届けとなりました。

次回の発行は2月下旬を予定しています。「水球のまち柏崎」の歩みなど、一層読み応えのある内容を目指して準備中です。学生たちの手づくりメディアを、これからもどうぞよろしくお願いします！

編集スタッフ：
経済経営学科4年　荒井 大
文化経済学科3年　梅澤 隼人
文化経済学科3年　宮川 浩一郎
文化経済学科3年　梅澤 佑介
文化経済学科3年　長井 美法
経済経営学科2年　榎本 優大
文化経済学科2年　神田 夏海
文化経済学科2年　駒村 彩佳